

下野市立細谷小学校

1 学校課題

- (1) 研究主題
主体的・対話的で深い学びの実現を目指して (2)
～児童が学びの手応えを実感できる算数の授業づくり～
- (2) 目指す子ども像
○進んで学習する子ども
○学び方や考え方を身に付けた子ども
○自らの力で課題を解決できる子ども

2 研究計画

月	研修内容
4	・学校課題研究についての共通理解 ・児童の実態把握 ・学習の手引き等を使った学習習慣・ノートの取り方の指導
5	
6	・第1回学習意欲調査 ・指導案検討
7	・第1回学校課題研究会 (5年)
8	・とちぎっ子, 全国一斉テストの結果分析 ・改善策の検討
9	・学力向上プランの作成 ・第1回全校一斉計算テストの実施
10	
11	・指導案検討
12	・第2回学校課題研究会 (3年)
1	・第2回全校一斉計算テストの実施 ・第2回学習意欲調査
2	・学校課題の成果と課題の確認 ・研究の振り返り
3	・次年度の計画

・授業の工夫改善

3 研究内容

- (1) 主な研究内容
- ① 教師の学び合い・指導技術の向上
 - ・参考図書の利用
 - ・他校の授業研究会への参加
 - ・情報交換 (放課後の自主的な学習会・教師相互による授業参観等)
 - ・本校における「主体的・対話的で深い学び」の指針作り
 - ・研究授業
 - ・教室環境づくり
 - ② 授業の創造・実践
 - ・児童が学びの手応えを得られる授業実践のための教材研究
 - ・見通しをもった指導計画 (めあての共有, 振り返りの習慣化)
 - ・興味関心を高める課題設定, 提示の仕方の工夫, 板書計画, ノート指導
 - ・教師の関わり方 (児童の発言をつなぐ指導)
 - ・ICT機器の活用 (児童や教師による説明, 分かりやすい授業づくり)
 - ③ 児童の基本的な学習習慣・スキルの向上
 - ・学ぶ楽しさ, 自ら学ぼうとする意識づけ (学級活動・通常の指導)
 - ・計算力の向上
 - ・プレゼンテーションスキルの向上 (国語・総合的な学習などに関連)
 - ・言語環境 (読書・辞書の活用等)
 - ・調べる力の向上, 自主学習の習慣化
 - ・地域や時事問題に関心をもたせる

(2) 研究の実際

① 第1回授業研究会（5年「分数の大きさとたし算・ひき算」）

9時間扱いの3時間目、分母の違う2つの分数の大きさを比べるために、通分の考え方を児童に発見させる課題解決型の授業である。

児童が学びの手応えを得られるよう以下の手立てを講じた。ヒントカードなどを活用しながら、児童の考えを図示した上でその意味を説明させることにより、数量的な感覚を伴った理解を目指した。考えを共有させるために、発表には書画カメラを使用した。説明用のLますや円・数直線などの図は透明のシートを重ね、2つの数量の違いを視覚化できるようにした。児童の発言で説明が足りないところを発表者や他の児童に問い返すことによって、児童の学習内容に対する理解がより深まるようにした。

授業研究会では、児童の実態に向き合い学力向上へと取り組む姿勢を評価していただいた。また、「時中に課題が『イメージ的なものから言語的・抽象的』なものへと変化した。学習課題をどう提示するか。」「児童の発表時の指名順序を、理論的に指名するならどの順序で指名するか、その一手をプロの目で検証を。」と宇大の先生より指導助言をいただいた。



② 第2回授業研究会（3年「三角形」）

9時間扱いの7時間目、二等辺三角形や正三角形の角の大きさのきまりを発見させる課題解決型の授業である。

課題設定やワークシートの工夫によって、児童が興味をもって取り組めるようにした。また、3人1組の小グループを作ったりヒントカードを工夫したりして、児童の自力解決や学び合いが進めやすくなるよう配慮した。小グループは、教科によってリーダーが交代し、各教科で全員が活躍できる場を設定できるようにした。また、発問で教師があえて「仲間」の観点を詳しく説明しないことで、児童の多様な考え方を導き出すようにした。これらの手立てによって、児童が学びの手応えを実感できる授業づくりをねらった。

授業研究会では、興味のもてる課題設定により、児童が意欲的に取り組んでいたことを確認した。また、既習事項を使って見つける三角形が二等辺三角形と正三角形であることに気付けた班とそうでない班とで課題解決に違いが出たことから、仲間分けの観点の示し方をどうするか更なる工夫や研鑽が必要なことなどを宇大の先生より助言していただいた。



4 本年度の成果と課題

(1) 成果

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」を実践するために、個を生かす、小集団の活用、考え方を比べながら話し合わせる指導法などを効果的に授業に取り入れることができた。
- ・ 分かりやすい授業づくりや考えを伝え合う手段として、日常的にICT活用ができた。
- ・ 児童中心の授業づくりのために教師の関わり方について、研究が進んだ。
- ・ 児童の自力解決や交流を中心とした過程重視の授業を実践し、児童の達成感や満足感（≒学びの手応え）につなげることができた。

(2) 課題

- ・ 低学年においては、児童間で学び合い交流する授業形態をさらに工夫していきたい。
- ・ 中高学年では、授業で楽しく得た学びを学力として定着させるために、楽しく習熟できる指導法や家庭学習の習慣化についてなどの手立てをさらに工夫していきたい。
- ・ 児童に自ら進んで学習に取り組ませるために、児童の好きなものを学習の要素として取り入れられるよう工夫していきたい。
- ・ 「学びの手応え」の捉え方が幅広かった。児童に多様な方法から学ぶ楽しさを味わわせることができたが、捉え方をもう少し焦点化・具体化することも考えられる。